

ヨシュア記 17章、20章「本気で神を信頼する」

導入

私たちは現在、ヨシュア記から霊的な教訓を学んでいます。この13-22章の部分は、霊的な教訓を見落とすと、読んでも退屈な個所です。

二週間前にお話した通り、カナンの地の相続分割の話は、当事者である人々にとって退屈なものではありませんでした。同じように、イエス・キリストにおける相続も、退屈な話ではありません。二週間前の学びを振り返ると、イエス・キリストにある相続には、おもに3つの特徴がありました。

1. 朽ちない資産である。(ペテロ第一1:4)

それは、何物にも壊されないということです。私たちのために天国に蓄えられているのです。

この世ではすべてを失うかもしれませんが、イエス・キリストからの相続を失うことはありません。

2. 汚れることがない。(4節)

汚れが付いたり、価値が下がったりすることはない、という意味です。すべての意味で完ぺきなものです。最高のプレゼントです。

3. 消えていくことがない。(4節)

永遠のものなので、古びることはありません。劣化することもなく、がっかりさせられません。

さて今日は、17章と20章から霊的な教訓を得たいと思います。

そこで、ふたつの教えに注目します。ひとつめは、17章に登場するエフライム族とマナセ族に与えられた地と関係があります。

ヨシュア記17:1-8を読みましょう。

17:1 マナセ部族が、くじで割り当てられた地は次のとおりである。マナセはヨセフの長子であった。マナセの長子で、ギルアデの父であるマキルは戦士であったので、ギルアデとバシヤンが彼のものとなった。17:2 さらにそれはマナセ族のほかの諸氏族、アビエゼル族、ヘレク族、アスリエル族、シェケム族、ヘフェル族、シェミダ族のものになった。これらは、ヨセフの子マナセの男子の子孫の諸氏族である。17:3 ところが、マナセの子マキルの子ギルアデの子ヘフェルの子ツェロフハデには、娘だけで息子がなかった。その娘たちの名は、マフラ、ノア、ホグラ、ミルカ、ティルツァであった。17:4 彼女たちは、祭司エルアザルと、ヌンの子ヨシュアと、族長たちとの前に進み出て、「私たちの親類の間で、私たちにも相続地を与えるように、【主】はモーセに命じられました」と言ったので、ヨシュアは【主】の命令で、彼女たちの父の兄弟たちの間で、彼女たちに相続地を与えた。17:5 こうして、マナセはヨルダン川の向こう側のギルアデとバシヤンの地のほかに、なお十の割り当て地があてがわれた。17:6 マナセの娘たちが、彼の息子たちの間に、相続地を受けたからである。ギルアデの地は、マナセのほかの子孫のものとなった。17:7 マナセの境界線は、アシェルからシェケムに面したミクメタテに向かい、その境界線は、さらに南に行って、エン・タプアハの住民のところに至った。17:8 タプアハの地は、マナセのものであったが、マナセの境界に近いタプアハは、エフライム族のものであった。17:9 またその境界線は、カナ川に下り、川の南に向かった。その町々は、マナセの町々の中であって、エフライムのも

のであった。マナセの境界線は、川の北で、その終わりは海であった。17:10 その南は、エフライムのもの、北はマナセのものであった。海がその境界となった。マナセは、北はアシエルに、東はイッサカルに達していた。17:11 またマナセには、イッサカルとアシエルの中に、ベテ・シェアンとそれに属する村落、イブレアムとそれに属する村落、ドルの住民とそれに属する村落、エン・ドルの住民とそれに属する村落、タナクの住民とそれに属する村落、メギドの住民とそれに属する村落があった。この第三番目は高地であった。17:12 しかしマナセ族は、これらの町々を占領することができなかった。カナン人はこの土地に住みとおした。17:13 イスラエル人は、強くなってから、カナン人に苦役を課したが、彼らを追い払ってしまうことはなかった。17:14 ヨセフ族はヨシュアに告げて言った。「【主】が今まで私を祝福されたので、私は数の多い民になりました。あなたはなぜ、私にただ一つのくじによる相続地、ただ一つの割り当て地しか分けてくださらなかったのですか。」17:15 ヨシュアは彼らに言った。「もしもあなたが数の多い民であるなら、ペリジ人やレファイム人の地の森の上って行って、そこを自分で切り開くがよい。エフライムの山地は、あなたには狭すぎるのだから。」17:16 ヨセフ族は答えた。「山地は私どもには十分ではありません。それに、谷間の地に住んでいるカナン人も、ベテ・シェアンとそれに属する村落にいる者も、イズレエルの谷にいる者もみな、鉄の戦車を持っています。」17:17 するとヨシュアは、ヨセフ家の者、エフライムとマナセにこう言った。「あなたは数の多い民で、大きな力を持っている。あなたは、ただ一つのくじによる割り当て地だけを持っていてはならない。17:18 山地もあなたのものとしなければならない。それが森であっても、切り開いて、その終わる所まで、あなたのものとしなければならない。カナン人は鉄の戦車を持っていて、強いのだから、あなたは彼らを追い払わなければならないのだ。」

エフライム族やマナセ族は、ヨシュアを煩わせました。彼らは、ヨセフの子孫たちでした。

ではここで、創世記41：50-52を読みましょう。

41:50 ききんの年の来る前に、ヨセフにふたりの子どもが生まれました。これらはオンの祭司ポティ・フェラの娘アセナテが産んだのである。41:51 ヨセフは長子をマナセと名づけた。「神が私のすべての労苦と私の父の全家とを忘れさせた」からである。41:52 また、二番目の子をエフライムと名づけた。「神が私の苦しみの地で私を実り多い者とされた」からである。

このふたつの部族がヨシュアを悩ませた理由は何だったのでしょ。

ヨシュア記17：14-18に注目してください。

この二部族は、割り当てられた土地が十分でないと言いました。ヨシュアはエフライム族の出身ですから（民数記13：8）、彼らの味方をして当然でしょう。

彼らの言い分も一理ありました。というのも、彼らはずいぶん増えたからです。民数記1：32-35に記された人数と、民数記26：34、37に記された人数を比べると、ヨセフの子孫は7万2,700人から8万5,200人へと1万2,500人増えています。これは、英国の中規模都市の人口に匹敵する人数です。

17：14にはこうあります。

17:14 ヨセフ族はヨシュアに告げて言った。「【主】が今まで私を祝福されたので、私は数の多い民になりました。あなたはなぜ、私にただ一つのくじによる相続地、ただ一つの割り当て地しか分けてくださらなかったのですか。」

ヨセフの子孫たちは、神が家族を増やして祝福してくださったので、自分たちは数の多い民になったとヨシュアに言いました。

すると、ヨシュアは15節でこう答えました。

17:15 ヨシュアは彼らに言った。「もしもあなたが数の多い民であるなら、ペリジ人やレファイム人の地の森に上って行って、そこを自分で切り開くがよい。エフライムの山地は、あなたには狭すぎるのだから。」

つまり、「それほど数が多いなら、巨人を倒して森を伐採し、その部族の大きさを立証すればよい」ということです。

ヨセフの子孫たちは、強敵を倒しなさいという呼びかけに改めて不服を言いましたが、ヨシュアは考えを変えませんでした。ただし、山地を切り開いて土地を広げることは許可しました。

この部族はプライドが高く、常に不平を言う傾向があることも注目すべき点です。

彼らは、ヨシュアだけでなく、ギデオンも煩わせました。

士師記8 : 1-3

8:1 そのとき、エフライム人はギデオンに言った。「あなたは、私たちに何ということをしたのですか。ミデヤン人と戦いに行ったとき、私たちに呼びかけなかったとは。」こうして彼らはギデオンを激しく責めた。8:2 ギデオンは彼らに言った。「今、あなたがたのしたことと比べたら、私がいったい何をしたというのですか。アビエゼルのぶどうの収穫よりも、エフライムの取り残した実のほうが、よかったではありませんか。8:3 神はあなたがたの手にミデヤン人の首長オレブとゼエブを渡されました。あなたがたに比べたら、私に何ができたのでしょうか。」ギデオンがこのことを話すと、そのとき彼らの怒りは和らいだ。

また、エフタも煩わせました。

士師記12 : -7

12:1 エフライム人が集まって、ツァフォンへ進んだとき、彼らはエフタに言った。「なぜ、あなたは、あなたとともに行くように私たちに呼びかけずに、進んで行ってアモン人と戦ったのか。私たちはあなたの家をあなたもろとも火で焼き払う。」12:2 そこでエフタは彼らに言った。「かつて、私と私の民とがアモン人と激しく争ったとき、私はあなたがたを呼び集めたが、あなたがたは私を彼らの手から救ってくれなかった。12:3 あなたがたが私を救ってくれないことがわかったので、私は自分のいのちをかけてアモン人のところへ進んで行った。そのとき、【主】は彼らを私の手に渡された。なぜ、あなたがたは、きょう、私のところに上って来て、私と戦おうとするのか。」12:4 そして、エフタはギルアデの人々をみな集めて、エフライムと戦った。ギルアデの人々はエフライムを打ち破った。これはエフライムが、「ギルアデ人よ。あなたがたはエフライムとマナセのうちにいるエフライムの逃亡者だ」と言ったからである。12:5 ギルアデ人はさらに、エフライムに面するヨルダン川の渡し場を攻め取った。エフライムの逃亡者が、「渡らせてくれ」と言うとき、ギルアデの人々はその者に、「あなたはエフライム人か」と尋ね、その者が「そうではない」と答えると、12:6 その者に、「『シボレテ』と言え」と言い、その者が「スイボレテ」と言って、正しく発音できないと、その者をつかまえて、ヨルダン川の渡し場で殺した。そのとき、四万二千人のエフライム人が倒れた。12:7 こうして、エフタはイスラエルを六年間、さばいた。ギルアデ人エフタは死んで、ギルアデの町に葬られた。

ダビデも煩わせました。

サムエル第二20 : 1-5

20:1 たまたまそこに、よこしまな者で、名をシェバという者がいた。彼はベニヤミン人ビクリの子であった。彼は角笛を吹き鳴らして言った。「ダビデには、われわれのための割り当て地がない。エッサイの子には、われわれのためのゆずりの地がない。イスラエルよ。おのおの自分の天幕に帰れ。」20:2 そのため、すべてのイスラエル人は、ダビデから離れて、ビクリの子シェバに

従って行った。しかし、ユダの人々はヨルダン川からエルサレムまで、自分たちの王につき従って行った。20:3 ダビデはエルサレムの自分の王宮に入った。王は、王宮の留守番に残しておいた十人のそばめを取り、監視つきの家を与えて養ったが、王は彼女たちのところには通わなかった。それで彼女たちは、一生、やもめとなって、死ぬ日まで閉じ込められていた。20:4 さて、王はアマサに言った。「私のために、ユダの人々を三日のうちに召集し、あなたも、ここに帰って来なさい。」20:5 そこでアマサは、ユダの人々を召集するために出て行ったが、指定された期限に間に合わなかった。

エフライム族とマナセ族の表面的な問題は、神が与えてくださった土地で満足しなかったことです。しかし、その根底にはさらに深刻な問題が隠されています。

このさらに深刻な問題について、お話したいと思います。

それは、神が適切に与えてくださることを彼らが信頼しなかったことです。神はもちろん、彼らの不安をご存知でした。（申命記7、20章参照）

私たちは、聖書の神を本気で信じているでしょうか。

私たちクリスチャンが日常生活や教会生活で直面する問題や課題に、自分の考えや力で対応しようとしていないでしょうか。神を信頼し、神のみこころ、神の備えに期待して問題に取り組んでいるでしょうか。

神が力を働かせて聖書の約束を成就してくださると信じて踏み出さない限り、神の御力が生きて働くのを見ることはありません。

モーセは、進んで神を信じ神の民をエジプトから救い出そうとしたのではありません。しかし、結局そうしました。何があったのでしょうか。それは、万能の神の御力が働くのを目の当たりにしたからです。こうして、200万人もの人々はエジプトから解放されました。しかも、ただ逃げ出しただけでなく、エジプトの富を持って去りました。

モーセは民を葦の海へと導きました。200万人の民は、ここで神を信頼しなければなりませんでした。人々はモーセに文句を言いましたが、その後、葦の海を開く神の御力を見、乾いた地を渡りました。

私は30年以上キリストに仕えてきましたが、神が望んでおられることをするための能力も資本も自分にはないというときには、神を信頼しなければなりませんでした。信仰によって踏み出すと、神は必要を備えてくださり、神に仕える力を与えてくださいました。

また、これまで奉仕した2つの教会では、教会員が神を信頼しきれていない状態であったにもかかわらず、指導者である私を支えてくれ、その結果、教会全体が大いに祝福されました。

さて、今年、神は私たちにどんな課題を与えてくださっているのでしょうか。

自分の力でなんとかできるなら、それは神の与えられた課題ではないでしょう。それならもう一度、考え直す必要があります。

では、20章に進みましょう。

ヨシュア記20：1-9を読みましょう。

20:1 【主】はヨシュアに告げて仰せられた。20:2 「イスラエル人に告げて言え。わたしがモーセを通してあなたがたに告げておいた、のがれの町をあなたがたのために定め、20:3 あやまって、知らずに人を殺した殺人者が、そこに逃げ込むことのできるようにしなさい。その町々は、あなたがたが血の復讐をする者からのがれる場所となる。20:4 人が、これらの町の一つに逃げ込む場合、その者は、その町の門の入口に立ち、その町の長老たちに聞こえるように、そのわけを述べ

なさい。彼らは、自分たちの町に彼を受け入れ、彼に一つの場所を与え、彼は、彼らとともに住む。20:5 たとい、血の復讐をする者がその者を追って来ても、殺人者をその手に渡してはならない。彼は知らずに隣人を打ち殺したのであって、以前からその人を憎んでいたのではないからである。20:6 その者は会衆の前に立ってさばきを受けるまで、あるいは、その時の大祭司が死ぬまで、その町に住まなければならない。それから後、殺人者は、自分の町、自分の家、自分が逃げて来たその町に帰って行くことができる。」20:7 それで彼らは、ナフタリの山地にあるガリラヤのケデシュと、エフライムの山地にあるシェケムと、ユダの山地にあるキルヤテ・アルバ、すなわちヘブロンとを聖別した。20:8 エリコのあたりのヨルダン川の向こう側、東のほうでは、ルベン部族から、高地の荒野にあるベツェルを、ガド部族から、ギルアデのラモテを、マナセ部族から、バシヤンのゴランをこれに当てた。20:9 これらは、すべてのイスラエル人、および、彼らの間の在留異国人のために設けられた町々で、すべて、あやまって人を殺した者が、そこに逃げ込むためである。会衆の前に立たないうちに、血の復讐をする者の手によって死ぬことがないためである。

イスラエルの民がまだヨルダン川の向こう側にいたとき、神はレビ人に与える町（民数記35：1-5）と逃れの場所を取っておくようにとモーセに仰せられました。

民数記35：9-15を読みましょう。

35:9 【主】はモーセに告げて仰せられた。35:10 「イスラエル人に告げて、彼らに言え。あなたがたがヨルダンを渡ってカナンに入る時、35:11 あなたがたは町々を定めなさい。それをあなたがたのために、のがれの町とし、あやまって人を打ち殺した殺人者がそこにのがれることができるようにしなければならない。35:12 この町々は、あなたがたが復讐する者から、のがれる所で、殺人者が、さばきのために会衆の前に立つ前に、死ぬことのないためである。35:13 あなたがたが与える町々は、あなたがたのために六つの、のがれの町としなければならない。35:14 ヨルダンのこちら側に三つの町を与え、カナンに三つの町を与えて、あなたがたのがれの町としなければならない。35:15 これらの六つの町はイスラエル人、または彼らの間の在住異国人のための、のがれの場所としなければならない。すべてあやまって人を殺した者が、そこにのがれるためである。

十二部族に相続地が割り当てられたので、ついにレビ人の町と逃れの場所を定めることができます。

今日は、逃れの町に注目したいと思います。

その前に、背景を少し見ておく必要があります。

モーセの律法が与えられる前も、神は殺人について基本的な規則を与えておられました。

創世記9：3-6を読みましょう。

9:3 生きて動いているものはみな、あなたがたの食物である。緑の草と同じように、すべてのものをあなたがたに与えた。9:4 しかし、肉は、そのいのちである血のあるままで食べてはならない。9:5 わたしはあなたがたのいのちのためには、あなたがたの血の価を要求する。わたしはどんな獣にでも、それを要求する。また人にも、兄弟である者にも、人のいのちを要求する。9:6 人の血を流す者は、人によって、血を流される。神は人を神のかたちにお造りになったから。

後に神は、殺人と過失致死を区別されました。

6つの逃れの町が必要だったのは、当時、犯罪捜査をする警察組織がなかったからです。それは各家族の務めでした。家族単位で、犯罪が計画的殺人であったか過失致死であったかを見極めなければなりません。

殺人は殺意を持って殺すことであるのに対し、過失致死は何らかの事故や暴力が原因で、人を死なせる結果になったことを指します。殺人と過失致死を見極めるのが困難な場合もあります。

もし、過失致死が認められたなら、逃れの町に指定された場所に身を寄せることができます。これらの町は、どこからでもたどり着けるように配置されていました。

過失致死が認められた人は、逃れの町に逃げると、身の安全が守られます。命と引き換えに自由を手放すということです。町の中では自由に動き回ることができますが、町の外には出られないので、ある意味で囚われの身です。逃れの町はとても小さい町で、玉造地域ほどの広さだったでしょう。

聖書を学ぶ人は、この逃れの町と、イエス・キリストの救いのイメージを重ね合わせます。私たちは、このお方を逃れの場所として身を寄せます。

ヘブル6：18は、私たちの救いを逃れの町に逃げ込むことになぞらえます。

逃れの町の名前が持つヘブル語の意味はとても興味深いものです。ヨシュア記20：7-8に記された順にここに挙げてみましょう。

1. ケデシュ＝ヘブル語で義
2. シェケム＝ヘブル語で肩
3. ヘブロン＝ヘブル語で交わり
4. ベツェル＝ヘブル語で要塞、またはとりで
5. ラモテ＝ヘブル語で高さ
6. ゴラン＝ヘブル語で放浪

これらの名前は、罪人がイエスを信じて信仰によって逃れるときに経験することを示しています。

まず、神がご自身の義を与えてくださるので、再び罪に定められることはありません。（ローマ8：1）

次に、羊飼いのように神の肩に担いでくださいます。

そして、神との交わりに加わることができます。

神が要塞またはとりでになつてくださるので、安心できます。

この世では放浪する旅人、よそ者であっても、神の恵みの高みに住まうことができます。

これら逃れの町から応用できる教えは明らかです。

人は罪を自覚してイエスのもとに身を避けたい限り、死後に神の御怒りを免れる安らぎの場所はないということです。

神はイエスをとおして逃げ道を用意してくださいました。イエスは、私たちの罪の罰を代わりに負ってくださったお方です。私たちが罪のある者であるのに、イエスが代わりに死んでくださいました。つまり、身代わりのいけにえとなられたのです。イエスは、神と私たち人間の仲裁者であります。

イエスを通さずに、安らぎの場所を得る方法はありません。

キリスト教は、他の宗教と違います。創始者であるイエス・キリストの復活がすべての土台です。イエス・キリストは、人の姿をした神です。この世に来られた唯一の目的は、創造主なる神との正しい関係を人が取り戻せるようにすることでした。

イエスは、私たちの罪の罰を負い、無惨な死を遂げられました。しかし後に死からよみがえり、多くの人に姿をお見せになりました。あるときは、500人ももの人の前に現れました。

イエスは今、天におられます。腕を広げて、人々を迎えておられます。

今日、イエスをあなたの主であり救い主として心にお迎えしませんか。

あなたの人生にこのお方をお迎えし、罪を赦していただき、きよめていただき、この地上での人生を導いていただきませんか。

イエスこそ、たましいの安らぎの場所です。

祈りましょう。